

# みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

## 特集 建築・建材展 セラミックタイル美濃2024

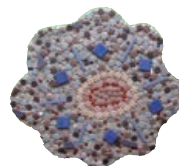
### 触れて、つくって、 美濃焼タイルの魅力を伝える 手触り×多様性

3月12日(火)～15日(金)の4日間、第30回  
「建築・建材展 2024」が東京ビッグサイト(東京  
都江東区)にて開催された(主催：日本経済新聞社)。  
同展は、住宅・店舗・ビル用の各種建材や設備機器、ソフト  
ウェア、工法などを幅広く紹介する建築総合展。  
多治見市美濃焼タイル振興協議会が主催する「セラミック  
タイル美濃2024」の展示内容を紹介する。

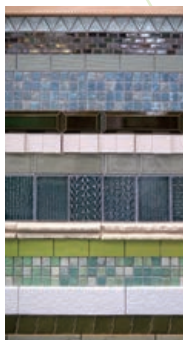


#### 「アトリエ MINO TILE」

名古屋芸術大学・コミュニケーション  
アートコースの松岡徹教授に協力いた  
だき、有志の学生たちがタイルアートを  
制作。来場者にも参加してもらい、「触れ  
る」「つくる」楽しさを伝えた。会期中、制  
作の様子はライブ配信した。



様々なタイルで彩られた受付カウンター。



#### 「Made in Tajimi」

##### 新商品デザイン開発研究会

多治見市陶磁器意匠研究所は、  
3Dモデリング技術の普及を目  
指し、市内のタイル企業と共同研  
究を行っている。会場ではタイル  
メーカー4社と飲食器メーカー1  
社の研究成果を展示した。



初日に多治見市の高木貴行市長が挨拶。  
背景の写真はモザイクタイルミュージアム。



## 「セラミックタイル美濃」各社ブース

今回は15社が出展し、新製品や試作品を披露した。  
通路には「タイルをさわれるストリート」として出展各社のタイルパネルを設置した。



### (株)アイコットリョウワ

白を基調としたシンプルな設えのブース。新製品Octoは、4枚の大判タイルを組み合わせて作った鉢カバー。シャープなフォルムでマンションや大型施設などでの使用を想定。5色あり、サイズは595×595mm、595×400mm、400×400mmの3パターンを用意。Octoは、ラテン語で数字の8を意味し、立方体に8つの頂点があることとかけている。

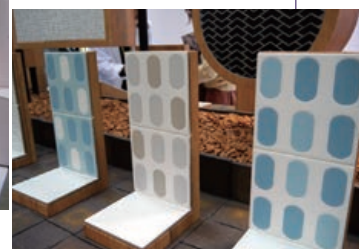
MINO



### (株)エクシズ

タイルを白色のキャンバスと捉え、繊細な色彩、模様、遊び心のあるデザインをコンセプトとする「SHIRO TILE」コレクション。NY在住のデザイナー、ダグ・マイヤー氏による「matto collection」に、既存のタイルをセレクトしてラインナップ。ドット柄やストライプ柄のタイルはシルクスクリーン印刷の技法を用い、凹凸感とマットな色合い、質感が特徴。ブースデザインも同氏が手掛けた。

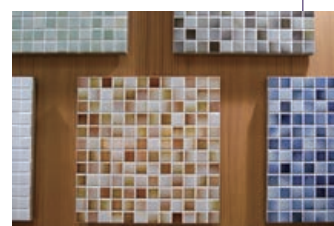
MINO



### (株)カネキ製陶所

美濃焼の風合いを生かした古窯変シリーズ(左)は、販売して20年以上になるロングセラー。波紋やボーダーなど、形状やサイズも豊富。色は種類ごとの設定で、全体で20色以上を揃える。新製品「ルフレ Lufure」(右上)は、一枚一枚の色合いの違いを楽しめる。新製品「銀雲 Ginun」(右下)は、銀色のぼかしが入る。

MINO





## 三協製陶(株)

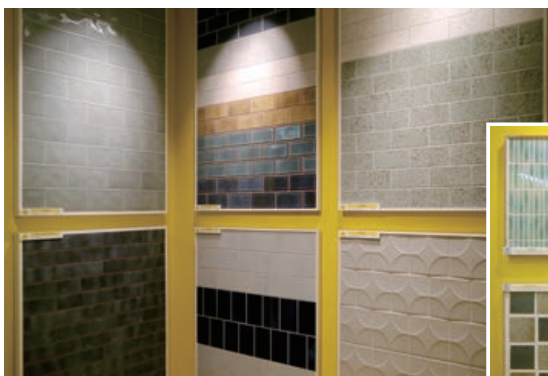
深みのある色合いを持つタイルが揃う。試作品「玉鬘(たまかざら)」(右-左)は、源氏物語の登場人物にちなんだ商品名をもつランタン型のタイル。立体的な縁取りと落ち着いた色合いがクラシックな雰囲気を演出する。試作品「YURA」(右-右)は、絵画のような青色のにじみが印象的。



MINO

## 杉浦製陶(株)

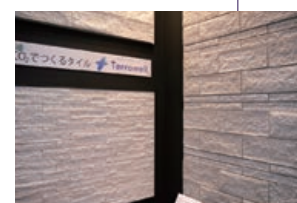
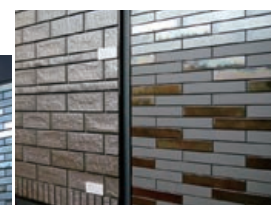
イエローを基調とした明るい空間に、新製品(左)と試作品(右)を展示。一見シンプルだが、釉薬や細部の形状に工夫を凝らしたタイルや、張り方によって様々な模様を楽しめるタイルを揃える。営業担当者がデザインした試作品21種類は、来場者に人気投票を実施。結果を考慮し、3種類が新製品になる予定。



MINO

## 鈴製陶(株)

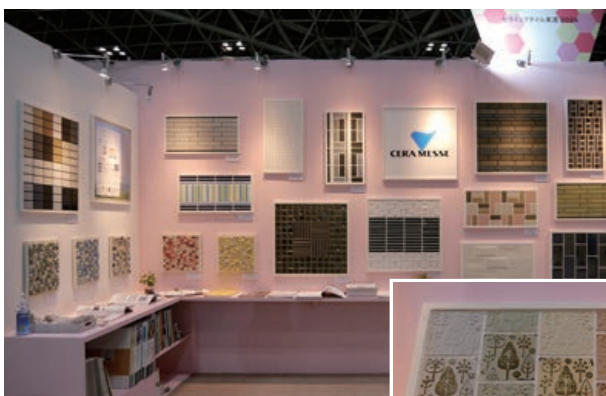
煌彩シリーズ(右上)は、光の当たり方により様々な表情を見せる。窯業廃土を再利用し、環境にも配慮。本割肌面のガンメタは銀色の光沢が特徴で、凹凸による陰影が独得の存在感を示す。(株)加納の「テラウェル」とコラボした本割肌シリーズを試作品として展示(右下)。焼かずに作る新素材のタイルで、CO<sub>2</sub>を吸収する機能を持つ。



MINO

## (株)セラメッセ

「北欧の森」(右下)は、陶磁器意匠研究所との共同研究による試作品。3Dプリンターを活用し、絵柄が立体的に描かれている。立体部分の色付けには印刷技術を用いる。工業製品でありながら、ゆらぎを持ち粘土で作ったような手作り感を出している。淡く優しい色合いで、24色展開するCaitaとも合わせて使いやすい。

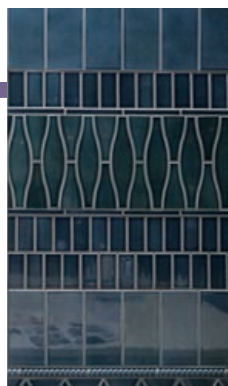
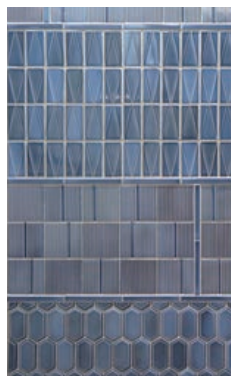


MINO



## (株)TNコーポレーション

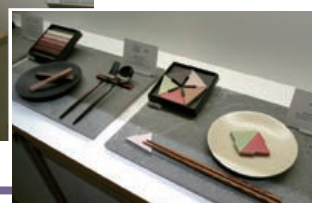
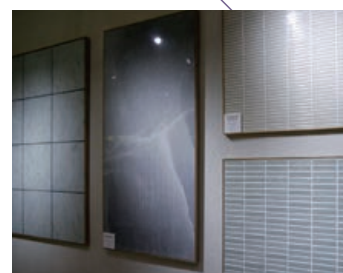
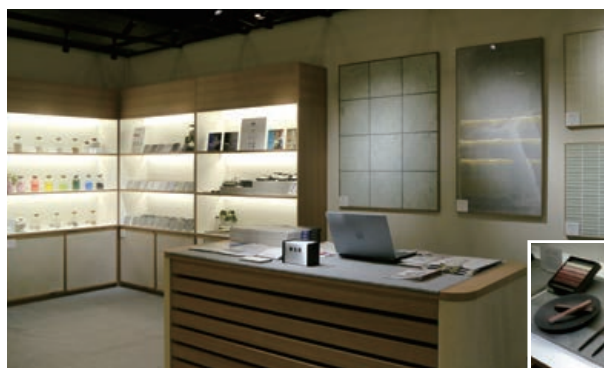
タイルを派生的に展開してシリーズ化。様々な色形を組み合わせるインパクトのある壁面を作り出すというタイルの可能性を伝える。新製品「絵本」(右、下)は素材から手作りし、作家が手作業で模様を描いた絵柄タイル(12種類)と白いタイルをセットで販売。アート作品のように空間を演出する。



MINO

## (株)TChic

タイルについて幅広く知ることができるTile Shopをイメージ。新製品のパネルとともに、原料や顔料、カットサンプル、タイル雑貨を展示した。また、環境保全への取り組みも紹介。「カルクセラム」はCO<sub>2</sub>を結晶化して人工的に石灰系鉱物をつくる技術。「リグレイズ」は産業廃棄物を自社工場内でリサイクルする取り組み。



MINO

## 長江陶業(株)

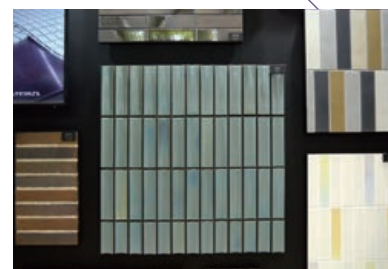
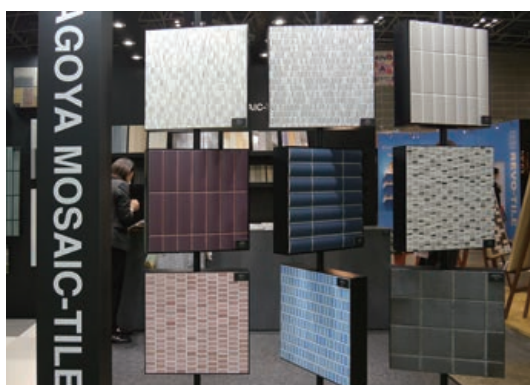
商社として扱う地元多治見および海外のメーカーの商品から、自社で企画したオリジナルまで、多種類のタイルを大小のパネルで紹介。特注品(右)の製作も手掛けており、地元のタイル商社こそそのネットワークを生かし、製作に適したメーカーの選択から、完成までのやりとりを担う。



MINO

## 名古屋モザイク工業(株)

テーマは「Touch(触れる)」。タイルを額装にしたり、手で動かせるパネルを設置したりと、触れやすいように工夫。表面に触れるだけでライトを点灯できる仕掛けを施した大判タイルは、外国の製品。「フィアンマ」(右)は釉薬の色むらを現代風に表現した凹凸のあるタイルで新しい和風のイメージを追求する。

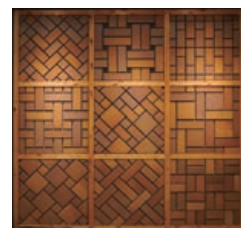
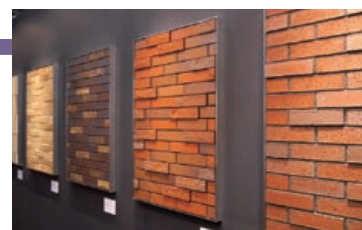


MINO



## ニッタイ工業(株) 岐阜工場

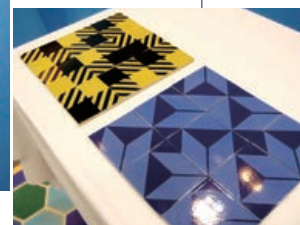
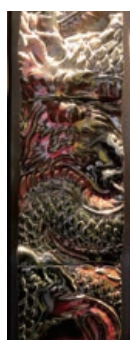
煉瓦メーカーとして創業し、80年以上湿式タイルを製作。展示には、その矜持と湿式タイルを作り続ける意志表示を込めた。釉薬は使用せず、色は土の配合と焼成方法によるもの。ざらりとした質感、武骨な味わい、一つとして同じものがない表情を伝えるとともに、様々な張り方の提案も行った。



MINO

## 久松製陶(株)

販売サイト「REVO-TILE」においてデザインや色を選んでタイルのシミュレーションをし、発注できるサービスをスタート。下地20色、模様は4色32パターン、サイズ2種類を揃え、10枚単位で購入することが可能。サイトの名称には「タイルで革命を!」の意味が込められている。海外作家が彫刻して製作するオーダーメイドのタイル(左)も手掛ける。



MINO

## (株) 丸喜

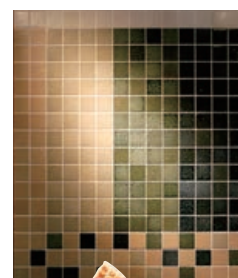
商業施設から住宅の壁から床まで、幅広く使用できる大型セラミックタイルを展示。見た目は大理石や木材の本物と見間違えるほど。天然素材と比べ、全体の柄のバランスを見るための仮並べが不要、メンテナンスが容易という利点がある。木目タイルには、表面にアンチスリップ加工がされている商品があり、室内と室外で使い分けができる。



MINO

## (有) 丸万商会

インテリアタイル、プールタイル、タイル雑貨の3本立てで商品を強化中。試作品「クラブト」(右)は、釉薬をたっぷりかけて表現した温かみのある色合いが特徴。海外輸出が多かったプールタイルは、国内のホテルや別荘でも採用が増えている。オーダーメイドのサインアートは、店舗装飾や看板としての使用を想定。裏面に張ったマグネットで壁に設置できる軽さもポイント。



MINO



# モザイクタイルの 過去・現在・未来

開催中～5月26日(日)まで

今回の企画展では、ミュージアムの原点であり、貴重な財産であるタイルの収蔵品に改めて光を当てた。時代を通してタイルを見つめることにより、未来のあり方について考える。



展示台のサイズは縦約3.3m、横約10.2m。向かって左側から「明治から昭和(戦前)まで」「昭和(戦後)から平成」「現代」の3区画に分けてタイルが並べられている。

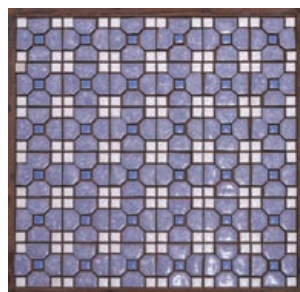
遠くから眺めると、正方形の布を組み合わせたパッチワークのよう。近づけば、それがタイルを入れた貼板とタイルパネルと分かる。その枚数は約250枚にのぼり、ミュージアム史上、かつてない量の展示だという。

約4000枚のタイルを会場全体に敷き詰めた前回の企画展「工場賛歌 焼成編」に続き、今回は正方形の貼板とパネルがぎっしりと並んだ。これだけのタイルを目の前にし、その多様さに驚く人も多いだろう。「多数を並べて面で見せる」ことはタイルの本分でもあり、その魅力が発揮される展示手法と実感する。

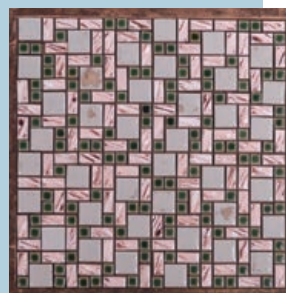
タイルの配置は時代ごと3区画に分けられている。左側は主に明治から昭和までの戦前のタイル、中央は主に戦後から平成までの貼板に入ったモザイクタイル。それらの収蔵品に加え、右側には現代企業のタイルパネルが並ぶ。解説は最小限にとどめられており、来場者は時代ごとの違いを発見したり、好みのタイルを見つけたりと、思い思いに楽しんでいた。

## ミュージアムの未来

現代のタイルでは多治見に所在する10社が出展した。「異なる会社のタイルを並べて見ることができるのは、ミュージアムならではのでしょう」と館長代理・岩



パズルのように組み合わせて、様々な模様を生み出す昭和のモザイクタイル。



井利美さんが意義を語る。会期中には出展企業のトップに話を聞くイベントを開催。「社長さんたちが子どもたちのヒーローになってほしいんです」。大人たちの熱意を感じとり、地場産業であるタイルに誇りや興味をもってほしい、という思いがある。

ミュージアムが開館して今年で8年。次なる10年のあり方を模索している最中という。「いろんな人とつながり、情報発信の場になりたいですね」。企画展はその第一歩ともなった。



第1区画には敷瓦(上)やマジョリカタイル(右)を展示。



## 関連企画

## ギャラリートーク

### 今こそ語ろう モザイクタイル

現代タイルの担い手たちは  
何を考えているのか

■日 時:3月30日～5月25日の毎週土曜日  
※GW期間中のみ5月3日(金)  
14:00から30分+質疑応答

■場 所:3階ギャラリー前  
■参加費:無料(入館料は必要)  
■定 員:20名まで(先着順)

※要予約(詳細はミュージアムウェブサイトを参照)



参加者には  
タイルピースの  
特製詰め合わせ袋  
をプレゼント